



'The world she wanted'
by Philip K. Dick from Science Fiction quarterly, 1953.5

新訳

彼女が望んだ世界

フィリップ・K・ディック

大森 望 訳

イラストレーション=fancomi

本作は彼の作家活動初期の1953年にアメリカのSF雑誌に
掲載され、現在も日本では単行本に収められていない貴重な作品である。
数々のディック作品の翻訳を手がけてきた大森望による新訳でお届けする。

目の前のテーブルには、煙草の吸い殻やビールの空き瓶や使用済みの紙マッチが散らかっている。ラリー・ブルースターは眠い目でそれを眺め、ビール瓶一本の位置を直した——よし、これで完璧だ。

「ワインドアップ」の奥では、少人数編成のバンドがディキシーランド・ジャズをにぎやかに演奏している。耳ざわりなジャズのサウンドが、薄暗いフロアに響く客の話し声や、カウンターでグラスが触れ合う音と混じり合う。ラリー・ブルースターは楽しげな満足の吐息を漏らした。

「これが涅槃ねはんつてやつか」と言ってから、自分の言葉に自分で相槌を打つようゆつくりうなずいた。「すくなくとも、禅の天国の第七層」

「禅の天国に第七層なんてないわ」どこか上のほうから、有能そうな女性の声が訂正した。

「たしかに、事実はそうかもしれない」ラリーは認めた。「でも、ぼくが言ったのはものの喩たとえだ。文字どおりの意味じゃなくて」

「もつと言葉に気をつけたほうがいいわね。口にしたとおりのことを、心で思っているべきよ」

「それに、心で思うとおりのことを口にすべきだと?」ラリーは相手をじっと見上げて、「どこかで会ったことがあつたつて、お嬢さん?」

スレンダーな体つきをした、金髪の若い女性が、テーブルの向かい側の席に腰を下ろした。バーの薄暗がりのなか、彼女の瞳はきらきらと輝いている。白い歯を光らせて笑みを浮かべ、「いいえ、初対面」と答えた。

「わたしたちの時間はたつたいま始まつたの」

「わたしたちの——時間?」ラリーはひょろ長い体を起こし、ゆつくりと背すじを伸ばした。この娘の晴れやかで有能そうな顔には、ラリーの頭を包むアルコールの靄を貫き、警戒心を呼び覚ますなにかがあつた。あまりに冷静沈着で、あまりに自信たっぷりの笑み。「どういう意味だ?」ラリーはつぶやくように言った。「なんの用?」